

---

# 物の怪

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物の怪

### 【Nコード】

N65090

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

江戸の豆腐屋文衛門は突如として家のあちこちが物の怪だらけになってしまった。その彼が選んだ選択は。ものがる妖怪を書いてみました。

## 第一章

### 物の怪

文衛門が家を出ようとした。しかし外は生憎雨だった。

彼は江戸で商いをしている。商売は豆腐屋だ。一応生きられるだけの売り上げはある。しかし家をかなり大きくした祖父の頃と比べると少し寂しい感じた。店だけやけに大きく見えるものになってしまっている。

それでまず出したのは溜息だった。

「やれやれ、雨だねえ」

「傘あるわよ」

家の奥から女房のお桂の声がしてきた。

「それあるから大丈夫よ」

「蓑はあるかい？」

「あるわよ」

そちらもあるのだという。

「それもね」

「そうか。じゃあどっちにしようかな」

「どっちでもいいじゃない」

また奥から女房の声がしてきた。

「あなたの好きなようにね」

「そうだな。そうするか」

「そうしたら？」

「じゃあ傘にするか」

文衛門はそちらにすることにした。

そうして傘を手にとってみる。それから家を出ようとする。そして傘を広げたその時だった。

「んっ!？」

持つ場所を見る。すると。

何と普通ではない。足がそこにあつた。しかも男の逞しいその一本足だ。脛毛が生えておりそのうえ指まである。筋肉がやけにしっかりしている。

その足を見てだ。文衛門はまずは我が目を疑った。

それで一度目をつぶってそれからもう一度見る。するとまだその足があつた。

「足！？どうなつてんだこれは」

「あはは、引つ掛かつた引つ掛かつた」

今度はすぐに声がしてきた。

「引つ掛かつたよこの人」

「な、何だ！？」

「この人引つ掛かつたよ」

するとであつた。傘が急に自分から動きだした。そうしてその傘がだ。

文衛門の手から離れてそのうえで暴れだした。見れば傘から一つ目と口、そして小さな両手があつた。その姿はよく浮世絵等で見るとそれであつた。

「手前、化け物か！」

「化け物じゃないよ物の怪だよ」

傘は彼の前を跳ねながらだ。楽しそうに言ってきたのだった。

「僕は物の怪だよ。から傘だよ」

「物の怪！？やっぱり化け物か！」

「だから物の怪なんだって」

「こつ言つ彼であつた。」

「僕はね。それなんだけれど」

「手前、何時の間に家の傘とすり替わつたつてんだ」

「ああ、傘は傘だよ」

「何っ！？」

「僕はあの傘だよ。随分長いこと使われてたからね」

しかしから傘は笑いながら話してきた。その口からやけに長い一

本舌が見える。

「それでこうなったんだよ」

「長いこと使ってたら物の怪になるってのか」

「そうだよ」

「こう言うのである。」

「それ知らなかったかな」

「そんな話知るものかよ」

むきになって返す文衛門だった。

「ものが化け物なんてなるかよ。そんなことはよ」

「だから僕がそうなんだけれど」

「嘘つけ、それだったらな」

彼はすぐに蓑を取ろうとする。丁度手が届くところに掛けられている。それを着ようとする。

しかしであった。その蓑もだ。彼が触れるとすぐにこう言ってきたのだった。

「ほれ、ものは粗末にするものではないぞ」

「げっ、今度は蓑が」

「折角ここまで長い間使ってきたのじゃよ」

蓑からの言葉だ。

「それだったらもう」

「まさか蓑もか」

「うむ、そのから傘と同じことよ」

蓑は自分から動きだしてきた。何故か火を出してきていて宙をふらふらと漂う。蓑もであった。

## 第二章

「蓑火になったのじゃよ」

「本当にどうなってるってんだ」

「だから見たままでじゃ」

それだけだというのである。

「わかったのう。これで」

「信じられるか、そんなこと」

文衛門はここでもむきになっていた。

「何でもものが物の怪になるんだよ」

「物の怪になってもわしは蓑じゃよ」

「火まで出してかよ。それでどうして燃えないってんだ」

「そういう火じゃから問題ない」

こつ言うだけであつた。

「気にすることはない」

「無茶言うものだな」

「無茶でも事実じゃ」

「事実なのかよ」

「左様、事実じゃ」

こつ言う蓑だった。

「じゃからわかることじゃ」

「認めなくてもなんだな」

「うむ、こつしてわし等は実際にじゃ」

「動いてるじゃない」

蓑だけでなくから傘も言ってきた。

「わしも蓑火になったしのう」

「僕はから傘にね」

「まさか妖怪が本当にいるなんてな」

文衛門はいぶかしむ声で言った。

「全くな。世の中わからんものだ」

「ああ、わし等だけではないぞ」

「そうだよ」

「ここで藁火とから傘がまた言ってきた。

「まだ他にもおるぞ」

「この家のものってどれも古いからね」

「何っ!？」

今はじめて聞いた話だった。

「それは本当か？」

「そうじゃよ。ほれ」

「そろそろかな」

彼等がこう言うようになった。すぐだった。

「あ、あんた！」

「おい、どうしたんだ！」

「出た、出たんだよ！」

お桂がこんなことを言ってきたのである。家の奥からだ。

「お化け、お化けが！」

「何っ、まさか！」

「そう、そのまさかじゃな」

「いや、話が早いね」

物の怪達だけが能天気であった。

「古いものを使っているとじゃ」

「心とか持つからね」

「それでも。こんなことになるとは」

唾然とする文衛門だった。こうして彼のごくありきたりな平和な日々は一変した。彼と女房は居間でだ。その物の怪達と話をするのだった。

二人の前に彼等が集まっている。そのうえで言ってきたのである。

「そろそろ言おうって思ってたんだ」

「丁度いい時だったね」

「そうそう」

「よくはない」

むっとした顔で彼等に対して返す文衛門だった。

「驚かせるなどは。どういうつもりだ」

「だってさ。普通の挨拶をしても面白くないじゃない」

「それでなのか」

「そうだよ。まずは面白くね」

「そうしないとね」

こう話してくる物の怪達だった。その言葉には悪意はない。見れば蓑や傘だけではない。筆も硯も筆筒もいる。湯飲みや茶碗も楽しそうに動いている。

とにかく家のもののおちこちが二人の前にある。そのうえで二人に話してきているのである。

「だからなんだけれどね」

「まあ旦那さんやおかみさんも喜んでくれたかな」

「どこはどうかな」

「馬鹿言うんじゃないよ」

お桂がむっとした顔で彼等に返す。

「いきなり筆が動いてそれで喜ぶ奴がいるものかい」

「あれ、そうなんだ」

その筆がその先をふりふりと動かして床の上を歩きながら応えていた。その筆にしても小さな手足があつて顔もある。中々面白い姿である。

その姿でだ。また言う筆であつた。



### 第三章

「驚いたんだ。それはよかったよ」

「よかったのかい、それで」

「だから普通にやったら面白くとも何ともないじゃない」  
「だからだというのだ。」

「そんなことをしてもね」

「何て奴だい、全く」

お桂はそれを聞いてさらにむっとした顔になった。

「つていうか奴等だね」

「うん、そうだね」

「僕達もそうだしね」

湯飲みや茶碗も動き回る。彼等にしても手足や顔がある。

「驚かせないとね」

「つていうか驚かせるのが仕事だし」

「そうだよ。それが物の怪じゃない」

また言う彼等だった。

「そうでしょ？だからさ」

「だから？」

「物の怪は人を驚かせるものじゃない」

このことを文衛門に話すのだった。

「いやあ、ものの見事に成功したね」

「よかったよかった」

「御前等壊すぞ」

むっとした顔で返した文衛門だった。

「そんなこと言つてたらな」

「ああ、大丈夫大丈夫」

「もう僕達物の怪だからね」

「それはないから」

また言う彼等だった。全く悪びれた様子はない。それどころか実に楽しげである。どの物の怪達も歩き回ったり飛んだりして一つの場所に留まらない。

「もうかなり丈夫になってるし」

「大体二人共捨てたり壊したりするの嫌いでしょ？二人共」

「そうでしょ」

物の怪達もこう言ってきたのだった。

「それはね」

「だから僕達だって物の怪になつたんだし」

「ものは大事にしないと駄目だよ」

お桂はこのことをしつかりとした顔で言ってきた。

「粗末にするなんてもつての他だよ」

「俺も子供にはよく教えている」

二人の子供達は今は皆寺子屋にいるのである。

だから二人で物の怪達と話をしているのだ。そして彼等と話をしているうちに二人は少しずつ落ち着いてきた。それでこんなことも言う文衛門だった。

「まああれだな」

「あれ？」

「あれってどうしたの？」

「なつてしまったものは仕方ねえな」

袖の下で腕を組んでの言葉だった。

「もう戻れることはできねえだろ」

「物の怪は死なないよ」

「壊れもしないし傷みもしないよ」

「わかった」

そこまで聞いて、であった。

一旦目を閉じてそれからだ。こう彼等に告げたのだ。

「おい御前等」

「うん」

「どうしたの？」

「事情はわかった」

「こつ彼等に言うのである。」

「そうした事情はな」

「いやあ、わかってくれて嬉しいよ」

「流石旦那だね」

「御前等は物の怪だ」

「これを言うのである。」

「それはもう隠せないからな」

「いや、隠すつもりもないしさ」

「それはね」

物の怪達も自分達を偽らない。相変わらず好き勝手に動き言葉を出している。

## 第四章

その彼等を見ながらだ。文衛門は言うのである。

「じゃあこのまま使っていいな」

「ああ、僕達をこのまま使うんだ」

「そうするんだ」

「それは嫌か？」

あらためて彼等に問うてもみせた、

「使われるのは嫌か？」

「いやいや、僕達は使われる為に生まれたからね」

「そうそう、僕は墨を入れられる為に」

硯が言ってきた。

「作られたし」

「僕は爪を切る為」

「僕は毛を抜く為に」

今度は爪切りと毛抜きだった。彼等も同じく手足と顔がある。

「その為に生まれたんだよ」

「使ってもらう為にね」

「使われない方が困るんだよ」

傘もそれを言う。

「驚かすのは好きだけれどさ。それ以上に使われないと困るんだよ」

「だからからね。それはね」

「使ってもらわないと」

彼等もそれぞれ言うのであった。

「だから使われないとね」

「困るんだけれど」

「よし、それならだ」

文衛門は袖の中で腕を組みながら話を聞き続けている。そうして  
だった。

「御前等、このまま使わせてもらつてぞ」  
「それでいいんだね」  
「言ったよね」  
「このままここにいろよ」  
「そして使ってもらつてよ」  
「よし、決まりだな」  
「また言う文衛門だった」  
「それでな。決まったな」  
「ちよつとあんだ」  
横からお桂が言つてきた。困惑した顔である。  
「いいの？相手は物の怪だよ」  
「そうだな」  
「そうだなって」  
「しかし使えるからな」  
「それを言うのである。」  
「これまで通りな。それに悪い連中じゃないしな」  
「それはね」  
「そのことにはお桂も頷くことができた。」  
「確かにそうね。悪い連中じゃないね」  
「僕達だつて楽しくやりたいだけだしね」  
「そうそう、明るく楽しくね」  
「そうしていただいだからね」  
物の怪達はここでも言う。そうしてだった。  
文衛門は今度は女房に対して言うのである。  
「いいか？これでな」  
「そうだね。悪ささえしなかったらいいよ」  
お桂もここで折れた。  
「それだつたらね」  
「よし、いいんだな」  
「ええ、いいよ」

納得した顔だった。ただ諦めも幾分か入っている。

「それならね」

「あとはあいつ等が寺子屋から帰って来たらな」

「また話すんだね」

「ああ。とにかく話は決まった」

それはだというのだ。また物の怪達に顔を向けてだ。

「よかつたな、これでな」

「よし、楽しくやらせてもらうよ」

「これからね」

こうして彼等と物の怪達の生活がはじまった。それは。

お桂がお茶を飲みたいと言うとだ。自然に湯飲みと茶道具が来た。しかもその中にはもう美味いお茶が入っていた。

「はい、くだりもののお茶だよ」

「飲んで下さいね」

「いつも早いね」

それを聞いて笑顔で話すお桂だった。お茶を飲んでだ。また言うのだった。

「お茶も美味いね」

「有り難う」

「そんなに美味いんだ」

「ああ、年季があるよ」

飲みながら笑顔での言葉だった。

## 第五章

「生きている年季の味がするよ」

「伊達に長生きしてないからね」

「そうそう」

湯飲みと茶釜が話す。彼等は宙にふわふわと浮かんでそれぞれ話す。

「おかみさんが生まれた時にね」

「やって来たお湯飲みさ」

「何だい、その言葉は」

お桂は今の湯飲みの言葉には目を少ししばたかせた。

「変わった言葉だね」

「ああ、今思いついたんだけれどね」

「そうなのかい」

「どう？それで」

お桂の口元で言う。自分から飲ませてきているのだ。

「この言葉」

「悪くはないね。むしろいいね」

「そう、だったらいいけれどね」

「そうだね。ところでだよ」

お桂はここで言葉を変えてきた。

「宿六はどうしてるんだい？」

「宿六って？」

「旦那さんのこと？」

「そうだよ、そっちにも行ってくれないかい？」

「こつ言つのである。」

「それで一杯ね。飲ませてあげてね」

「うん、わかったよ」

「それじゃあね」

彼等もそれに頷いてだ。すぐに店のところにいる文衛門のところに行く。そうしてそのうえで彼にも飲ませる。こんなことがあった。筆と硯はだ。自分で動く。自然と字を書いている。

「ほお、これは便利だな」

文衛門はそれを見て呟いた。

「自分で書けるのか」

「旦那さんが書きたいこと言つてよ」

「こつちで書くからね」

彼等の方もこう言つてみせる。机の上で筆が自然に動き紙に書いていく。そして硯もだ。自分から墨をすつてそのうえで水に溶かしていつている。

その墨も文字もかなり立派なものだ。少なくとも文衛門がすつたり書いたりするものとはだ。全く違っている。

「うつむ、この文字は」

「どうしたんだい？」

「何かあつたの？」

「俺が書く字よりずっと綺麗だな」

実際にそうだった。彼が書くよりもだ。

「こんな綺麗な字は絶対に書けないな」

「だって僕達これが仕事だしね」

「書くのがね」

「それも当然だよ」

筆も硯も笑顔で話してみせた。

「こうして書けるのもね」

「当たり前前つていつたら当たり前前かな」

「そうだよね」

しかも連携もしっかりとしている。完璧であつた。

「しかも年季もあるしね」

「それもあるから」

「俺よりも古いつてのかい」



文衛門は彼等が文字を書いていくのを見ながらまた述べた。

「そうだっていうのかよ」

「うん、だって先代が子供の頃からだしね」

「使ってもらってたから」

「それでか」

それを聞いて納得した文衛門だった。

「それでだつてのかい」

「そうだよ、物だつて使えばね」

「これは前にも言つたけれど」

「そうだったな。しかしあれだな」

文衛門はまた言うのだった。

「最初はびっくりしたけれどな」

「そうそう、驚いたでしょ」

「それがいいんだよ」

驚かせることが趣味の彼等にとっては最高の話である。

そしてだ。文衛門はその彼等に対してまた言うのだった。

「そうだな。それにだ」

「それに？」

「どうしたのかな」

「いや、一緒に住んでると何かと楽しいな」

また言うのであった。

「やっぱりな。話し相手にもなるしそつちで仕事をしてくれるしな」

「ああ、そうなんだ」

「そういうこともあるんだ」

「一緒になつてはじめて気付いたことだよ。物の怪もいいものだな」

こつちも言つたのである。

「いや、飽きないよ」

「そういう旦那だから僕達だつて一緒にいるしね」

「大切に使ってもらつてたからね」

「なあ。これからも頼むな」

文衛門は笑顔になっている。

「ずつとな」

「うん、お互いにね」

「宜しくね」

筆と硯だけではなかった。他の面々も出て来てだ。そうして文衛門に対して言うのだった。彼はその物の怪達に対しても言った。

「ずつと一緒にいたいものだよ」

「言うねえ、あんたも」

ここでお桂も出て来た。

「最初はびっくりしたってのに」

「それも挨拶のうちだってことだな」

「挨拶なんだね」

「この連中のな。しかし慣れてみればな」

実際に今慣れている。だからこそ言えることだった。

「こんな楽しい連中もないだろ」

「確かにね。それはね」

「だからだよ。これからも宜しくな」

周りにいる面々に笑顔で告げていた。笑顔なのはお桂も同じだった。見れば物の怪達も楽しい顔でいる。これが文衛門の選択だった。幸せになる選択だった。

物の怪 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6509o/>

---

物の怪

2010年11月1日21時55分発行